九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『風に紅葉』物語覚書(一)

辛島, 正雄
九州大学大学院博士課程

https://doi.org/10.15017/10521

出版情報：文獻探究. 8, pp.39-49, 1981-06-07. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『風に紅葉』物語覚書（一）

辛島正雄

はじめに

『風に紅葉』物語二冊[1]は、『無名草子』や『風葉和歌集』等にも所見がない、中世の擬古物語の一つである。伝本は宮内庁書陵部蔵の一本が知られるのみ、所謂「天下の孤本」である。この本は、昭和三十一年、『桂宮本叢書　第十七巻　物語三』に収められ、簡単な解題を付して翻印されたので、今日では誰でも容易に目にすることができるようになった。以後、この物語を直接に扱った研究としては、次の三点がある。

(1)市古貞次「『かぜに紅葉』について」（「史学文学」2巻2号　昭34・5）

(2)小木喬『鎌倉時代物語の研究』（昭36）第二篇・三「風に紅葉物語（春日山）」

(3)樋口芳麻呂「かぜに紅葉の典拠について」（「愛知大学国文学」8号　昭41・12）

市古・小木両氏の論文は、いずれも内容を詳しく紹介した上で作品の特色を述べておられ、有益だが、特に、市古氏のものは、物語史的な位置づけについて的確な把握を示されており、小木氏のものは、きわめて詳細・正確な梗概が、注釈のない現時点では、最も信頼のおける読解の指針となっている。樋口氏の論文は、その題目の示すとおり、引歌・本歌などの指摘を中心になされたものである。

従来、この物語の評価はといえば、総じてかえり見られることの少ない中世物語の中にあっても、かんばしいものではない。市古氏は、

> 鎌倉時代の物語が、かつての物語文学を模擬しながら、貴族の年代記的性格を濃くして物語としてのまとまりを失ってゆくこと、そうして一面では怪奇の想を凝らし、耽奇的・頽廃的に陥ってゆく（中略）そのような諸傾向を濃厚に示した擬古物語の最末期の作品であるといえよう。

と、いわば衰弱していった物語のなれのはての姿であると、その物語史上の位置を定められ、また、小木氏は率直に、「非常に感銘の薄い、むしろつまらぬともいうべき物語である」との実感をもらされ、樋口氏も、「平弱な食い足りない作品」と言われた。しかし、小木氏がその一方で、『散逸物語の研究　平安・鎌倉時代編』（昭48）の「物語史概説」において、

> その内容も、当時の世情を写実的に叙した世相小説とも称すべきものである。従来の擬古物語とは全く異なったタイプの作品である。そしてまた注目すべき作品であると言わなければなら

ない。

とか、さらに、

「源氏」以来何百編という有り来たりの「もののあはれ」の擬古物語にあきたらず、もっと世情を有りのままに写した小説を

と志したのではあるまいか。

と言われていることもあり、物語の崩壊過程を考える上で、やはりそれ相当の分析がなされねばならない作品というべきであろう。

さて、筆者は、昭和五十五年一月から約一年間、この物語を輪読する機会をもつことができた。もっとも、参加者はといえば、九州大学の大学院と学部の学生数名、確かな読解力をもってリードすることのできる者もいなかったのだが、身のほど知らずにも、従来まったく注釈の行われていない未開拓の物語に挑んでみようということで、始まったのであった。

この『風に紅葉』を取り上げた理由としては、一つに、全体の分量が手ごろであること（二年にまたがると、熱心だった四年生が途中で抜けてしまうことになるので、毎週一回二ページのペースで、四十回ほどで終えられる分量）があるが、むろんこれは副次的なことで、長くなくて注釈がないということだけなら、ほかにも放置されたままの物語は多い。それをあえてこの物語と定めたのには、一種の好奇心（学的関心というにはほど遠い）とでもいうべきものがはたらいていたと思う。

右の引用文中に、「当時の世情を写実的に叙した」作品だとの一節があったが、これは、市古氏が、『とはずがたり』や『増鏡』に描かれる「鎌倉時代の宮廷・貴族の乱倫な生活」の反映が示されているのではないか、とされて以来、ほぼ定説化した見方で、ここから、この物語の顕著な特色としては、〈頽廃性〉ということで強調されることが多い。例えば、三谷栄一氏が「物語文学の終焉」（『物語文学の世界』〈昭50〉所収）という論文でこの物語に論及されたのも、「鎌倉時代物語の頽廃性」なる一項で、『有明の別』とともにであった。要するに、あの『とはずがたり』の物語版ともいうべきかたちで知らされてきたわけで、そこに興味をそそられたという次第である。[2]

それにいま一つ理由をあげるとすれば、この物語が、現存するかたちで一応完本と認められるということがある。すぐれた物語であっても、とかく残欠本が多く、作品研究の大きな障碍となっているのは周知のところだが、その点この物語では、欠巻部分の内容復原などという困難な作業を必要とせず、恵まれている、というべきであろう。

こうして始まった輪読会も、十二月にはひととおり読み了えることができたものの、おおよその筋や人物関係はわかっても、肝腎の細かい文章表現のあやとなると不明な点ばかりで、毎回が疑問の山積みであった。特に、比較すべき異本のないことが、しばしば解読の流れを中断させた。もちろん、ここからは推測本文批判による途があることはわかっているが、原本にあたるいとまがなく、結局、『桂宮本叢書』に翻印された本文[3]に頼りきることになり、その点、大きな制約を受けたまま、曖昧なかたちで終わらせてしまうことに

なった。

このような次第であるので、研究の名を冠するのもおこがましいが、わからないということでそのままにしておくのも心もとなく、会の責任者として、これまでの私どもなりの検討の足跡を、この紙面を使って逐次報告してゆくことにした。方法的にも、結論でも、未熟で誤りの少なくないことであろう。先学諸賢のご教導をいただければと思う。

まず、第一回として、物語全体を見わたすためには至便であると思われる年立と系図とを掲げ、年紀や構想につき、一二の問題をメモしてみることにする。

1

この物語の年立は、作品の規模自体が短小で、構成も単純なこともあり、また叙述のしかたも、時間が遡行したり、事件が同時併起したりということもほとんどないため、特に破綻とか前後齟齬するといった箇所は認められない。主人公元服後は、逐年で物語は進行し、年度の代り目も、多くは「年も返りぬ」のように明示されているので、確認も容易である。ただ、巻一と巻二の間の時間的な関係がどうなっているのかが、唯一明瞭を欠くところである。これについて市古氏は、「年立の上では、巻一の終りから直ちに巻二に続くものと解しておきたい」として、同年の記事ととっておられるが、いかがであろう。

巻二の年次を定める基準となる記事としては、主人公と一品の宮との間に生まれた姫君の裳着の条に、「内大臣殿、ひめ君五にになり給、御はかまぎ、院にてせさせ給」（一七七）とあり、その翌年にも六歳であることが見える（一八五）。姫君の出生は主人公十五歳の時であり、巻二巻頭は姫君の裳着の前年であるから、その時主人公は十八歳、巻一巻末では十七歳であった、ということは、その間に一年の時間の経過を考えるべきである。もっとも、巻二巻頭で、主人公の進言により関白が太政大臣に一時官を譲ることにし、関白の宣旨が下るのが「十一月一日」（一七五）で、巻一巻末の場面が九月か十月くらいであるから、直接するのであってもおかしくはないが、右のように年次決定の基準となるものがあり、それに従って何ら不都合も生じないのである以上、そのように解すべきであろう。

念のため、このことの妥当性を示すと思われる事例を一つあげておく。巻一に聖の予言として、「いま四五ねんの程に、君のかぎりなき御つゝしみにみえ給。その程にまいり侍らん」（一六八）とあるが、巻二で予告どおり再び主人公のもとを訪れた聖の二度目の予言に、「あけんとし、君のかぎりなき御つゝしみ也」（一八一）とあるのを照らし合わせてみると、筆者の年立によれば、巻一の予言が主人公十七歳の時、巻二の予言が二十歳、予言の実現が二十一歳となり、「いま四五ねんの程」という最初のことばのとおりに運んでいるが、市古氏の説では、巻二の年齢が一歳ずつ若くなって、すこし具合が悪いのである。

2

この物語が現存する二巻で完結しているのかどうかは、外部徴証が皆無である現時点では決定的なことは言えないが、現存巻末までの構想をあとづけた上で、さらにそこからの発展が考えられるか否か、といった意味での「完結性」ならば、ある程度一定の理解に達することは可能かと思われる。いまそのことをつぶさに検討する余裕はないが、未完結説の最大の根拠となっている故式部卿宮の姫君のことについて、一言しておきたい。

前掲三氏の中では、市古氏のみ現存二巻で完結するものと考えておられるが、小木氏は、

もし現存の二巻以上あったとしても、おそらく、大部なものではなかったであろうと思う。（中略）構想も行き詰って、残るところは、悲恋の女主人公式部卿宮の中君が、どうなるかということだけである。

と述べられ、樋口氏は、

本物語は二巻が現存するが、式部卿宮の姫君との交渉はまだ緒についたばかりで、その進展は今後にゆだねられていること、（中略）などからすれば、作者は物語の第三巻以下を書き継ぐ意図をもって巻二を結んだかと推測される。

と、「現存二巻だけでは、物語はなお未完成の感が深い」とされる。

二十歳の冬、主人公は、承香殿女御の里邸の西の対に可憐な姫君を見出だし、深く契るが、三日目に引き取ろうとした時、すでに姫君は承香殿に放逐された後で、その行方を知ることはできなかった――というわけだが、小木・樋口両氏は、三輪到着以後、現存本では姫君の消息を伝えるところがない、と解されたものと思われる。しかし、実は、姫君のその後が、暗示的にではあるが知らされるところがあるのを、年立を追ってもらえばわかるであろう。その本文を掲げる。

としもくれがたになりもてゆく。ゆきかきくらし、あれたるそらのけしきにつけては、こぞまよはかしてしゆきのうちのおもかげもおぼしいでらる。つねに夢にみゆるが、それもいまはよになき人のさまなるは、いかなるにか。まさる御物なげきにまぎれすごし給しかど、つくづくかきつらねおぼしいづる事のかずには、いとあはれなり。（二一七）

「去年まよはかしてし雪のうちの面影」というのが、姫君のことである。その人が夢に現われるが、「今は世になき人のさま」であるというのだから、すでにこの世にいない＝死んだ、ということなのではあるまいか。

右の解釈が正しいとすれば、もはや主人公が姫君をその腕に抱く日は永遠に去ったのである。まさか、この後、屍を求める主人公の姿が描かれることはあるまい。物語は終息した――故式部卿宮の姫君との一件に決着がついていないということのみによって次巻への展開の可能性を考えるというのなら、筆者はこのように見るべきだと思う。

ただし、いうまでもないことだが、右の一事によって、現存二巻の完結性を強弁するつもりはない。まだ樋口氏の説の引用から外したいくつもの事項[5]もあるし、それより先に、自分自身の現存本内部

での構想の行方をあとづける作業を果たすべきだからである。詳細は今後に期したい。（続稿）

（一九八一年五月稿）

〔注〕

（1）『桂宮本叢書』の解題によると、第一冊は「かせに紅葉」と本文同筆の外題が表紙左上に記されているよしであるが、これは物語冒頭の一句により仮に付された題名であろう。また同書では、第二冊をその冒頭によって「春日山」と仮称しているが、同一作品の一冊・二冊を別様に呼称するのも紛らわしいので、以下、『風に紅葉』巻一・巻二ということで統一することにしたい。

（2）最も新しくは、石川徹氏が「物語の流れ」（「解釈と鑑賞」昭55・1。「総覧・物語文学――竹取物語から御伽草子まで――」なる特集が組まれた）という概説の中でふれられた時も、「恋愛というよりセックスが書かれている点、かの『問はず語り』に似ている」との一言であった。

（3）『桂宮本叢書』の口絵に、巻一・巻二の巻頭（一丁表）の写真が掲げてあるが、これと翻字された本文とを比較してみると、巻二の「あるましき事のあらんやうにおほしさはきたるを」を「といの御さまを」（一七四）とある一節は、このままでは文脈不整でわかりにくいのだが、写真では傍線部が「おほしさはきたるをといの」と読め、スムースに続く。これは誤読なのか誤植なのかわからないが、こうした例はこの種の本の宿命として避けられないこととは思われるものの、活字本の危険なところであろう。原本と突き合わせての確認を急ぎたい。

（4）『風に紅葉』の引用は『桂宮本叢書』に拠り、所出ページを示したが、同書には、漢数字とアラビア数字の二様でページをうってあるので、いま漢数字の方を用いた。引用にあたっては、私意に濁点を付し、句読点をあらため、疑わしい箇所には（ママ）と注記した。

（5）「主人公は右大将を自ら導いて妻の一品宮と契りを結ばせ、一品宮の出産、死去という重大な事態をひきおこすが、そのような不可解な行動に出た主人公の心理について、巻二ではまだ充分な説明が与えられていないこと、一品宮の死は、暗い出生の秘密を背負った若君を物語に登場させる必要から設定されたのであろうが、若君はまだ乳児の段階にとどまっていて、作者の意図が未開花であること、主人公が出家もせず中途半端な状態で終っていること」、以上が中略部分である。

――九州大学大学院博士課程――

× × × ×

〔『風に紅葉』年立・系図（私案）〕

さきに記したのとは順序が逆になってしまったが、以下に『風に紅葉』物語二冊の年立と系図とを掲げる。

主人公年齢	主要事項	備考
	・関白、古い大臣の女との間に男児誕生（一四三）	
	〈この間約八年〉	
	・関白、宮中より女一の宮を盗み出し騒動となるも、許され結婚。やがて男児・女児誕生（一四三～四） ・もとの上の若君元服、三位中将。 ・三位中将、十四歳で権中納言。 ・権中納言、十五歳の春の末、急死。母北の方も後を追うように死去。（一四四） ・この頃、中納言の君腹に権中納言の忘れ形見の男児誕生。（一六五）	・女一の宮腹の若君、七・八歳で童殿上、叔母の中宮に魅了される（一六一）
13	・女一の宮腹の若君元服、正二位中将（一四四） ・二位中将、万事に卓越（一四四～五）	・「とし月へだゝりて」（一四四） ・若君十三歳。
	・二位中将、中納言兼右近大将。一	・「げんぶくのつぎの

	品の宮と結婚。愛情こまやか。 ・四月、関白の姫君、春宮参り。局は宣耀殿。寵あつし（一四五） ・夏頃、一品の宮、懐妊（一四六）	とし」（一四五） ・一品の宮十五歳。 ・春宮十四歳。
14	・石清水臨時祭（三月）の還立で、大将に文を渡す女あり。 ・同じ頃、一品の宮、女児出産。（一四七） ・六月頃、宣耀殿、懐妊（一四八） ・七月初旬、一品の宮と女児、宮中に参る（一四七） ・七月七日、乞巧奠、帝をはじめ、管絃の遊びを催す（一四八） ・八月、宣耀殿、妊娠三ケ月で里下り（一四八～九）	・女は梅壺（一五二）
15	・二月、大将、太政大臣邸の梅見の宴に招かれ、小姫君の後見を依頼さる。その夜、太政大臣の今北の方と契る（一四九～一五一） ・三月初旬、夕暮時、大将、北の方・梅壺・麗景殿が集まって琴を合	・「としも返ぬ。きさらぎのそらうらゝかなるころ」（一四九） ・北の方二十六・七歳。

16

奏するところを訪う。その夜も北の方との逢瀬あり（一五三～四）

・三月十日すぎ、宣耀殿、男皇子出産。春宮、関白邸に行啓（一五五）

・三月下旬、大将、北の方との逢瀬の後、その導きで梅壺と契る。（一五五～六）

・大将、承香殿に漢籍のことを質問、その筆跡のすばらしさに心惹かれる（一五七～八）

・四月十日すぎ、大将、一条の宮に里下りしている承香殿と逢う。（一五八～一六〇）

・大将の憧れは叔母の中宮。（一六一～二）

・冬頃、宣耀殿、再び懐妊（一六二）

・夏頃、宣耀殿、日に日に衰弱。

・七月初旬、宣耀殿、里下り。祈禱つづく（一六二）

・八月二十日すぎ、大将、唐帰りの聖招聘のため、自ら難波に出向く。聖、快諾（一六二～四）

・「はなのかたみ恋しきゆかりの色のふぢなみさきかゝりて、えんなるゆふべのほど」（一五五）

・承香殿は中宮より年上（一六二）

・「としも返ぬる夏ごろより」（一六二）

17

・大将、住吉にて異母兄故権中納言の忘れ形見、女装の若君とひき会わされ、京に連れて帰る。（一六四～七）

・聖、上洛、その加持により宣耀殿恢復。

・九月初旬、宣耀殿、男皇子出産。（一六八）

・聖、大将に、これから四・五年の間に大きな災いが訪れるであろうことを警告、その時に再び参上することを約し、禄に手をつけず修行に発つ（一六八～九）

・九月～十月、大将、若君を宣耀殿と対面させる。宣耀殿はそのなれなれしさに立腹するも、大将は猫かわいがり（一七〇～三）

・大将、父関白に、将来のため、官を一時太政大臣に譲ることをすすめる（一七四～五）

・十一月一日、関白の宣旨下る。太政大臣、関白に。

・若君十一・二歳。

・京到着は、出発の翌翌日の夕方。

・「二三日かぢなどまいるに、御心ちしだいにかろくならせ給て、七八日になれば、もとの御心ちなるに、（中略）又わか宮にてうまれさせ給へり」

・「そのゝち三日ばかりかぢまいりて」

・「よの中しづまりて」とあり、宣耀殿・大将とも菊襲を着る。〔巻一〕

18	・大将、内大臣兼任。 ・十二月、梅壺、立后、中宮に。もとの中宮は皇后宮（一七五） ・承香殿、梅壺に先を越されたことを嘆く（一七六）	・権大納言、右大将に。
19	・正月、前関白の女装の若君、元服。引入役は今関白。 ・若君、中将に。今関白の小姫君と結婚。 ・今関白の北の方、二品を賜る。（一七六） ・八月、譲位、朱雀院に。前関白、復官。一の宮、立坊。宣耀殿、立后、中宮に、局も弘徽殿。 ・中将、三位に。 ・内大臣の姫君、朱雀院にて袴着。（一七七） ・斎宮、上洛。琴（きん）の名手。 ・二月から、大将、前斎宮を招き、姫君に琴を習わせる。 ・前斎宮、内大臣を慕わしく思うが、	・「とく（ママ）返て」 ・姫君は中将より二歳年上。 ・姫君五歳。 ・「あすばかり返しわ

20	諫められ、気持をしづめる。（一七八～一八〇） ・十月、聖、再び訪れ、来年が内大臣の大きな災いの年だと警告、加行に励むように指示（一八一～二） ・内大臣、人の世の無常も思い知られ、今のうちに関係のあった女たちにもう一度会っておきたいと思う。（一八三） ・内大臣、承香殿の里を訪れ、西の対に可憐な女を発見、忍び入り契りを交わす（一八三～五） ・十一月の末、内大臣、物忌と降りしきる雪とをおして、女のもとへ二日目の訪れ。別れに互いの単衣を交換（一八六～七） ・三日目、内大臣、女を迎えるべく準備、使を送るが、西の対はもぬけのから（一八八～一九〇） ・姫君、東山の尼上を頼り、それに従って三輪に移る。形見の単衣を肌身離さず、涙（一九一～三） ・十二月十日すぎ、内大臣、承香殿	たしきこへ給べき日」（一七八） ・女は承香殿の劣り腹の妹君。承香殿の不興をかい籠居（一八七） ・内大臣の姫君六歳。（一八五） ・承香殿、内大臣が妹君に通うのを知り、激怒、邸から追い出す（一九〇～一）

の里を暇申しに訪う（一九三～五）
・翌々日、内大臣、太政大臣の北の方と梅壺に暇乞いに訪う。（一九五～六）
・十二月二十日すぎ、内大臣、一品の宮とともに、叔父の中務宮から譲られた二条京極の邸に、加行のため移る（一九六～七）
・十二月二十七日から、内大臣、三時の勤行。

・「きみは返給まゝに（中略）日一日こなたにふしくらし給て、又の日」（一九五）

・正月、内大臣、三日間は一品の宮と床をともにする。
・三位中将、宰相中将に。いよいよ内大臣に瓜二つ（一九七）
・内大臣、一品の宮の独り寝を気づかい、宰相中将を導く。一品の宮の嘆き（一九八～九）
・その後も内大臣の手引きで、一品の宮と宰相中将の関係絶えず。
・二月十日すぎ、内大臣の勤行も残りわずか（一九九）
・三月初旬、内大臣の勤行果てる。

・「としもくれはてぬ」

21

一品の宮、懐妊。
・閏三月を経て、四月、一品の宮、腹帯をする（二〇〇）
・秋、一品の宮、衰弱。祈禱はじまる（二〇一）
・八月十日頃、一品の宮、小康を得、姫君をまじえて合奏（二〇二～三）
・八月は出産予定の月だが、その徴候なし（二〇三～四）
・九月十日すぎ、一品の宮、無事男児出産。一同安堵。
・九月二十日宵、一品の宮の容態急変。内大臣の抱きかかえる膝を枕に、寝入るようにして息絶える。（二〇四）
・なきがらを白河の御堂に葬送。
・内大臣・宰相中将、それぞれに悲しみ深し（二〇五～六）
・十月一日、内大臣に弘徽殿中宮より弔問。
・内大臣、一品の宮の面影を自ら絵に描き、本尊にして、阿弥陀仏と並べて夜の御帳にかける（二〇七）

・「をりしもこそあれ、むつきのころのなみこへししわざなるべし」
・「夏もすぎ秋にもなりぬれば」

・「あけぬ□（るか）もゆめのうちながら、又その日もくれゆけば」（二〇五）
・「冬のはじめになりぬる日」

21

・一品の宮の四十九日、七僧の法会。
・その夜、内大臣、父関白に呼ばれてその邸に渡り、故帥宮の姫君と引き合わされるも、拒絶。（二〇九～二一〇）
・内大臣、中宮に対面、仏道修行に専念したい旨、打ち明ける。（二一一～二）
・内大臣、朱雀院・后の宮と対面。（二一三～四）
・内大臣、関白に、官位を返して仏道修行に専念したいという決意を伝える。関白、反対するも、かなわず。
・宰相中将、中納言兼大将（二一四）
・十一月十九日、大将・内大臣より伝言と偽り、帥宮の姫君に接近、契る（二一四～六）
・五節（十一月）の頃、内大臣、加行再開（二一六～七）
・年末、内大臣、昨年の今頃行方不明にした女のことを思い出すも、夢に見える姿は、もはやこの世の人ではない様子（二一七）
・后の宮、出家して女院。年内に、一品の宮の忘れ形見の若君を迎える。
・太政大臣の小姫君、姓振二ヶ月。（二一八）

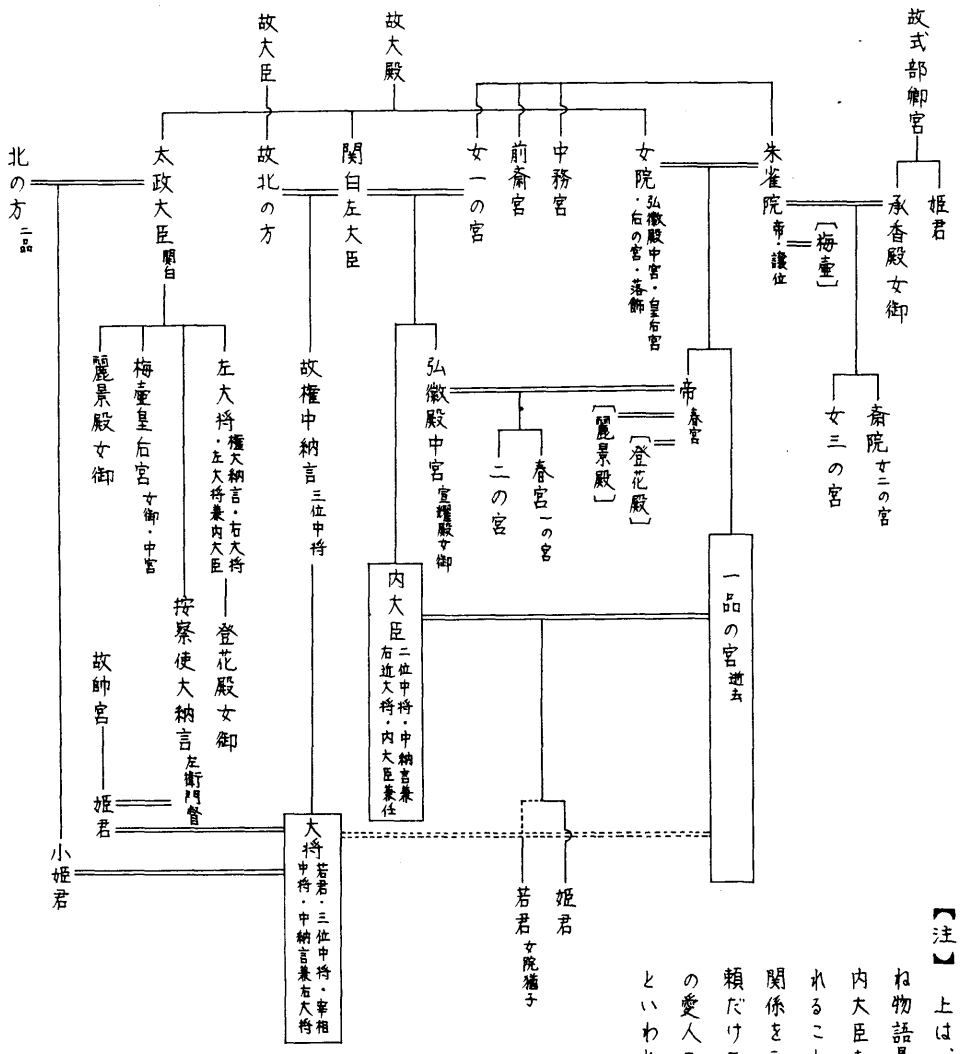
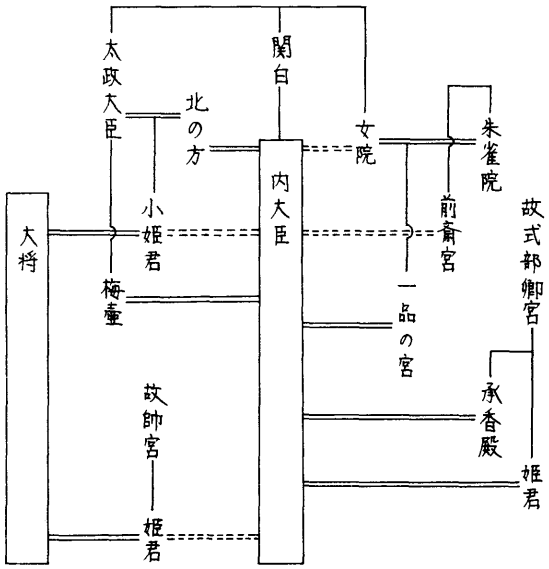
・右大将、左大将兼内大臣。
・「ねまちの月」（二一六）
・「としもくれがたになりもてゆく」

22

・もののはえなき新年（二一八～九）
・正月初旬すぎ、帥宮の姫君、物思いに身も弱り、修学院に籠っていたのを、大将もしばしば通っていたが、太政大臣の按察使大納言、盗み出し、かしずく。（二一九～二二〇）
・大将、姫君を奪われたのをあきらめがつかぬも、内大臣の意見で、思い切る（二二〇）

・「としも返ぬ」
・按察使大納言、もと左衛門督（一五一）
・帥宮の姫君、大将の胤を宿す（二二〇）

〔巻二〕



【注】 上は、全体の主要登場人物の系図である。呼称はおおむね物語最終官位により、経歴を細字で注記した。主人公の内大臣をめぐる恋愛関係は、煩雑になるのでここに書き入れることはひかえ、別に左にそれを掲げたが、═══は密通関係を示し、┆┆┆┆は単なる思慕関係、あるいは親の結婚依頼だけで終ったものなどを示す。なお、市古氏が「主人公の愛人であると共に、その代理のような役をもつとめる」といわれる大将をも関係に加えた。